

REVIEWS

ボーダーを行き来する

竹国友康 『日本を生きた朝鮮牛の近代史』

畑中 小百合

本書は、一九〇〇年代から第二次世界大戦終結まで役利用を主な目的として日本に輸入（移入）された朝鮮牛について、日韓の資料をもとにまとめた大著である。朝鮮農業に欠かせない存在として伝統的慣行のもとに大切に飼われていた朝鮮牛は、その温順な性格と粗食にも耐える丈夫さに目をつけた日本の牛馬商らによって買い付けられ、やがて植民地体制のもとで総督府と日本政府が検疫制度や移入ルートを整備したことで「内地」の農村に普及し、第二次大戦中は缶詰や皮革製品などの軍需のためさらに大量に日本に移入された。しかし、総督府の一方的な指導のもと日本の「一大好牧場」と化した朝鮮では、朝鮮牛の市場価格を低廉なまま固定され、農家は貧困を極めた。釜山鎮から海を渡る朝鮮牛たちを載せた船は、第二次世界大戦の終わり近くまで運行されていたという。

本書は実際のデータや証言をもとに、朝鮮牛をめぐる政策とその実態を詳らかにしているが、一貫して牛の眼に寄り添って描かれている。朝鮮牛がたどったルートを「朝鮮各地の飼養農家→各地の牛市場もしくは牛馬商の飼養施設→最寄りの鉄道駅→京釜本線釜山鎮駅→釜山鎮牛市場もしくは移出牛商の飼養施設→釜山検疫所での繋留検疫

→釜山検疫所での繋留検疫→船での輸送→下関の福浦検閲所での繋留検疫→下関家畜市場もしくは下関の仕出し駅→購入先の最寄り駅→各地の販売業者もしくは農会→飼養農家」（154頁）と、まるで旅の行程表のように示すくだりでは、私も牛と共に長い苦難を経て海を渡り見知らぬ土地の農家にたどりついたような気になった。また、朝鮮牛と共に働き共に寝起きした山形県の農家や、朝鮮総督府の畜産技師として赴任しながらも朝鮮の風土や習慣に合わない総督府の増産政策を批判した松丸志摩三など、牛に深い愛情を注いだ人間たちの姿が、「文字や数字の向こうにいたはずの牛たちの『顔』、そしてその牛たちとともに働き生きた人びとの『顔』」（296頁）をすくいあげようとする著者の膨大な文献蒐集と同等の熱量で行われた現地への旅や関係者へのインタビューによって、丁寧に、愛おしく描かれている。

自然と向き合い共に暮らしてきた人びとの感覚に、私も何度かハッとさせられたことがある。農家生まれの老いた両親の「さつまいもを細かく碎いて馬にやるのは子どもの仕事」といった昔話や、兵庫県の農家の人たちと村芝居の公演で新潟を訪れたとき「田んぼの色と匂いがいい」と目を輝か

せた姿は、都会暮らしの私には異文化でしかなく、新鮮に映る。しかし、彼らはそもそも「自然」のように抽象化して語らない。牛馬や田んぼと生活を共にすることは、目の前の牛馬や田んぼと関係を築くことである。彼らが『朝鮮のことはわかっている』という思い上がった錯誤」(288頁)に陥ることはないだろう。安易に「自然」などという言葉を使い、「癒やし」などという貧困なイメージしか持たない私のような者が、実態に合わない政策を押し付ける側になってしまうのだろう。(もちろん本書では「自然」という言葉は使われていない。少なくとも安易には用いていない。)

牛と人間、過去と現在、日本と朝鮮の間にある「ボーダー」を軽やかに行き来すること。「ボーダーレス」ではなく、「ボーダー」を行き来することが必要なのだ。

(はたなか さゆり 予備校講師)

竹国友康『日本を生きた朝鮮牛の近代史』有志舎、2021年